

石井十次における「救貧」から「防貧」への展開

—— 大原孫三郎との交流を通じて ——

岡 野 初 枝

1. 石井十次と岡山孤児院

石井十次は慶応元年(1865)4月、宮崎県(高鍋藩)の下級士族石井萬吉の子として生まれた。4歳のときから就学し15歳まで儒学教育を受けた。父が西南の役に参加したことなどもあって、「過激な国家主義的な傾向を持つようになっていた」¹⁾と柴田善守は述べている。

石井が明治13年(1880)政府攻撃の嫌疑で2か月近く獄中にあった時、同室の者から西郷隆盛の教えについて聞き、多大の感銘を受けた。その教えとは、減私奉公、敬天愛人、開墾と教育であった。16歳で内野品子と結婚、翌明治15年、病を得て医師萩原百々平にかかり、ここでキリスト教の大意と信仰に生きることの尊さを教えられた。このキリスト教への転進については、「萩原の説得か、石井の希望かは分からない」²⁾が、良いと思ったことはすぐに実践に移す石井の性格は、「五指社を組織し、荒野開拓事業をはじめて翌年失敗」³⁾したり、遊廓に売られた友人の妹を、多額の寄付金を集めて救済したり、「朝晩学校」⁴⁾等でも見られる強い性行である。病がいえと「翁の教訓に従って、生涯を仁術医業に投じ、基督教の宣布を目的とすること萩原百々平翁の如くせんと決心」⁵⁾し、岡山県甲種医学校に入り、一方で牧師金森通倫のいる岡山基督教会の世話を受けた。

この時期に「一種の使命感、開墾事業、キリスト教という彼の生涯の特色ともいうべきもの」⁶⁾があらわれている。

明治20年(1887)4月、岡山県邑久郡の太田医師のもとで代診をしていたとき、「備後の遍土^(ママ)寡姉其の二子を伴い隣家大師堂に泊せるものにあい、それに神恵を伝えたり」⁷⁾という事件に会い、寡婦前原つねに頼まれてその子定一を預かり、他に孤児2名を伴って岡山へ帰った。当時住職もおらず空いていた岡山市門田屋敷の三友寺を借りて、孤児教育会を設立し、同時に岡山孤児院を開いた。当時石井は22歳だった。

このときの石井の行動は、彼の日誌によると次の様な経過を取っている。3月31日、「予は、病、難、苦、死の内にあるの兄弟姉妹と共に、其の苦しみを共に苦しみ而て其の喜びを喜びとせんと欲せり」⁸⁾と記し、欄外に慈善会第一の決心と書いた。5月6日には最初の「邑久郡慈善会趣意書」を書き、6月30日は慈善会概則第二稿のなかで「各地の慈善家有志家に説き其の他の義捐金等を募集する等一略一岡山に孤児貧児教育院を設立せんと欲す」⁹⁾と其の意思を明ら

かにし、孤児等の救済の契機を待っていたことが分かる。

当時、社会は経済不況の時期にあり、農民や下級士族、都市細民など下層社会における貧困の堆積や災害などの発生で、岡山孤児院に収容される孤児は年ごとに増加し、石井は医者になるか、孤児の父となるかの決定を迫られることになった。明治22年（1889）1月、石井は孤児の父になる決意を固め、三友寺裏の墓地で4年間学び得た医学書やノートをすべて焼き尽くしたことは有名である。

この間の石井の気持ちの揺れは次のように書かれている。1月6日、自分の路は医学全科卒業をなさながため勉強すると覚悟を書きながら、翌7日「霊を拝して医学を棄てんとの念起れり」、石井の卒業を待つ両親のことを思い涙しているが、10日「焼医籍従霊神」¹⁰⁾と書いて、「霊のお助けにより医学を棄て神様に奉仕する決心をし医書を焼盡せり」と記した。注目するのは、「神様に奉仕する」と書いていることである。

石井が孤児教育事業を始めた頃の孤児院の経営は孤児教育会があたり、会員の会費によって運営された。経営を善くするために孤児教育会の会員を多く募集することが必要で、そのため石井は京阪神、四国にも旅行し会員を募った。

柴田によれば、石井は別表のように会員を組織し、明治21年末には1200人を越えた。

石井はこの頃経営が順調なことを神に感謝し、無制限収容の決意をする。しかし石井はこの会員の寄付に依存することが神への信頼と矛盾することに気付いた。それはイギリスの孤児院長ジョージ・ミューラーが来日し、その講演記録や、その事業の原則を学んだことによる。「借金をせず、人に頼らずただ神様に依頼し神様の証人となり神様に栄を帰すべきことを決心せり」¹¹⁾と書き、そのための祈禱をしている。それ以後、石井は借金をせず人に頼らず、神の偉大な意志の表現である臨時寄付金による経営をはじめた。

柴田は、「石井は彼の孤児院事業が神の行為であり、それ故に孤児院の経営がゆきつまるということはあり得ないという確信を、いよいよつよめている」¹²⁾と述べている。

経営方針は、会費による経営から臨時寄付金へ、そして事業による自活の道へと進んでいくのである。

別表 岡山孤児教育会府県別会員数
(明治21年8月現在)

府 県	会員数	府 県	会員数
岡 山	428人	滋 賀	18人
京 都	259人	広 島	16人
兵 庫	151人	大 阪	14人
愛 媛	103人	鳥 取	8人
宮 崎	21人	高 知	1人

他に米国13人を加えて計1032人
(柴田著「石井十次の生涯と思想」63P.)

明治22年11月、石井は、孤児院の理想を「孤児院を一つのクリスチャンホームとなし、平和に充ちたる家族となし、愛の御誡の内に衆多の孤児を育つべし」¹³⁾と書き、石井夫妻が孤児たちの父母となり、孤児院はその家庭であるという考えをもった。これは、孤児をただ収容保護するのみでなく、孤児の父母となって愛育し、孤児院を地上の天国とする考えである。孤児を教育して自立させ、社会に必要な人間にしていくため、院内に孤児院小

学校を設立し、「労働学問並行の教育主義」¹⁴⁾を実践した。

公立学校教育の欠点を、「道義感情発育の不足にあり一略一智育を発達するところにして、於是道義、体格まで発育させんとするは非望の企て」¹⁵⁾と言い、孤児院小学校で適切実益の教育法をするために、収容児が通学していた操山小学校を退学させた。

明治23年(1890)11月の退学願に「今般実業教育並行の主義を実行することに決候上は時間等の都合有」¹⁶⁾と書いた。

実業教育並行主義は、「労働は人物養成に最上の良策、人物を造るの金杖、幾多の子女を教育し十年の後社会に必要な人物を輩出」¹⁷⁾することを目的にした。岡山孤児院での実業の内容は印刷事業、米搗と米の販売、理髪などで、ハンカチーフ織や牧場、製糸事業も其の理想として考えていた。ハンカチーフについては熟練工女を岡山孤児院に招いて技術を習得させ、米国へ輸出することも計画している。この実業教育並行主義と共に、岡山孤児院において石井の行った教育の理想を実践するための教育法等について次にふれる。

2. 岡山孤児院経営と石井の思想

石井は、岡山孤児院の経営方針として、実業による労働自活を採り、明治28年(1895)、岡山孤児院の「憲法」を次のよう宣言した。

「第1、目的。天下無告の孤児を救済し其父母に代わって養育するを目的とす。第2、入院。6歳以上12歳以下その何国を問わず幾名にても入院を許す。第3、維持。天父の冥助と院内各自の労働とに由って之れを維持拡張し、敢えて寄付金品を受けず。第4、教育。儿女既に一定の年齢に至れば昼間は実業に従事せしめて己のパンを食はしめ、夜間は文学技芸を学ばしむ」¹⁸⁾と。

これ等はルソーの「エミール」から影響を受けたもので、「孤児教育の前途に希望を強くし一略一喜び勇んでこの天職を完ふせん」¹⁹⁾と感激して日誌に書いている。

さらに集合教育よりも散在的孤児院の効果を考えて、宮崎の茶臼原に孤児院の本拠地を建設することを計画した。

また、岡山孤児院運営の柱になる、年齢によりその時代にふさわしい教育や実業の内容を決めた「時代教育法」*や、経営および教育の基本原則となる「岡山孤児院十二則」を提示した。

* 時代教育法

児童の成長発育を三段階に分かつ幼年時代(6歳~10歳)はあそばせ少年時代(10歳~16歳)は学ばせ青年時代(16歳~20歳)は働かせるという教育法である

「岡山孤児院十二則」とは、(1)家族主義、(2)委託主義、(3)満腹主義、(4)実行主義、(5)非体罰主義、(6)宗教主義、(7)密室教育、(8)旅行教育、(9)米洗教育、(10)0小学教育、(11)実業教育、(12)托鉢主義である。そのなかでも、石井の思想を良く現しているのは以下である。

家族主義は、彼の言う家族制度（小寮舎制度）で1家族10～15人に一人の主婦（保母）を付けて、衣食住全ての世話にあたらせる制度である。委託主義は、5～6歳の児童を、子供の居ない農家に里子に出す委託制度である。満腹主義は石井の独創で、腹一杯食べることが孤児たちの素行を変えていく秘訣と考えた。密室教育は、善行を賞するの、悪行を戒めるのも他人の面前でなく、密室ですということ、「石井は岡山孤児院の収容児たちのなかで種々の問題をもつ子供たちに対しては、それぞれ個別的にその心境を十分に聞いてやった」²⁰⁾のである。実業教育は、労働自活のために商工、農業教育をおこなった。この十二則は、実業による自活を原則としながら、人道的扱いを重んじていることにより、石井の孤児への愛情を汲み取ることができる。石井は、茶臼原の田野の開拓で実業を起こし、やがては成長した孤児同志が家庭をもち、そこにも孤児を受け入れていく理想境を築くことを考えていた。

このように拡大していった岡山孤児院の活動であるが、事業の失敗や夫人の永眠、伝染病の流行などの悲運が続いた。この状況を柴田は、「石井にとっては、岡山孤児院の労働自活、商業部その他の事業上の失敗と、一連の悲劇的な事件とは次元をことにするものではなく、天にある唯一の神の意志としてうけとられるべきものであった。—略—天上の神の論理がただちに地上の論理として考えられているのである。」²¹⁾といい、「狂信的ともいうべき石井の行動から岡山孤児院という偉大な社会事業も発生したのであろうが」と分析している。

岡村重夫は、「岡山孤児院十二則」を、「児童の発達を援助し、将来の生活の自立を計るための周到な教育計画の実行を含むもの」で「慈善事業を宗教事業としてよりもむしろ社会福祉事業たらしめる方向性を示すものとして興味あるものを含んでいる」²²⁾と評価している。岡村は、「民間の個人または集団が、法律によって強制されたり、事業を委託されるのではなく、まったく自発的に他人の困難を援助する活動」を「自発的社会福祉」²³⁾とよび、「岡山孤児院の設立は、石井のキリスト教信仰から発したことは事実であるが、—略—親の保護を失い、社会から疎外された児童の正常な成長、発達と将来の自立生活を可能にするための教育の必要性という、社会人としての基本的要求を満たすためのものである。その点においてそれは慈善事業であると同時に社会福祉事業であり」また「社会福祉活動である」²⁴⁾と位置付けている。これは、最初石井の個人的同情または情熱からはじまった不幸な孤児貧児の救済、すなわち「救貧」に留まらず、孤児に教育をし、自立の道を歩くことを目的にした岡山孤児院の方針は、同じ境遇に本人が陥らないための「防貧」に進んでいたと考える。

柴田は、わが国の社会福祉の原点を日本神話にたどりながら、「いきおい」のあるものが「いきおい」²⁵⁾のないものへの援助ととらえ、石井の「無制限収容」を評して、「社会福祉というものはその能力の限界のなかで行うものではなく、社会のニーズに応える責任があり」そう宣言し実践した石井は「社会福祉の本質を自覚」²⁹⁾し、それが石井の本領であり人柄であると、熱をこめて述べている。

岡山孤児院の収容児の多くが大阪南部のスラムの出身者であったことから、石井が大阪南部

ではじめた大阪事業を、柴田は「セツルメント事業」とよび、保育所、夜学校、同情館、相談事業の開始を「これらは防貧事業であり、孤児発生そのものの予防を目的とした」²⁷⁾ものであるととらえた。

岡山孤児院の経営における石井の「救貧」とどまらない「防貧」の思想は、さきに岡村も述べていたように、孤児院の経営の中で派生したものだけでなく、石井の個性のなかに育まれてきたものが多いと考えられる。

池田敬正は、石井が実施した小寮舎制による家庭主義や自由裁量にまかせること、満腹主義や密室主義にみられる、収容児の人格を尊重しようとした石井の人格主義の現れ²⁸⁾とみているが、それが孤児を自立へむかわせる「防貧」の思想に至ったと考える。

前後するが明治26年(1893)の日記で石井は孤児教育を、第1の救いは職業を教えること、第2は真理をしらしむこと、第3の救いは神をしらしむことといい、石井の事業が宗教的实践を通じて、個人の自立を考えるものであることを明らかにしている。

明治42年(1909)石井はかつての東洋救世軍活動を復活し、大阪で孤児救済、貧児教育を岡山孤児院大阪事務所として広く行おうとしたが、「名称について、日本救世軍から抗議が出て」²⁹⁾友愛社と改め、本社を大阪市北区出入橋東詰におき、事業の目的を「不幸なる同胞に同情し、その幸福を増進する」とした。内容は孤児救済、保育所、同情館、殖民など³⁰⁾であった。

ここで、石井は次に述べる大原孫三郎に「友愛社」の社長になり、大阪をはじめ東洋の天地の社会問題を实地に解釈して欲しい³¹⁾と手紙で頼んでいる。

3. 大原孫三郎の役割

倉敷で薬店を経営していた林源十郎は、クリスチャンとして石井と親交があった。岡山孤児院に何かあったときには薬を無償で提供するなど尽力していた。石井と林は同じ年の生まれ、そこへ15歳年下の大原孫三郎が、父孝四郎の頼みで、林に紹介されて石井と出会う。大原家は倉敷の資産家で近在に聞こえていた。孝四郎のおもいは東京遊学中からの「悪友との縁を断ち切れない孫三郎を心配し」³²⁾、林や石井との交流による感化を期待したのである。

岡山孤児院に出入りするようになった大原は強く石井に心服し、その度合いを増した。

大原孫三郎は日記の中で「余は、余の天職の為此の財産を与えられたのである。—略—大原の財産なるものは神の為に作られて居るもので、神の為に遣い尽くすか、或はその財産を利用すべきものと信じる。」³³⁾と書き、「彼が天職と信ずるに至った、キリスト教の伝道、社会教育の振興、育英事業、救済事業、なかなづく岡山孤児院の援助等の仕事に力を注ぐに至り」³⁴⁾真面目が発揮されたと書かれている。従って、大原は岡山孤児院への援助を少しも惜しまなかった。

大正3年(1914)石井没後、その事業を継承し孤児院の院長を引き受けた大原は、大正7年まで茶臼原へも旅行し、「大原のお父さん」振りを発揮したという。岡山孤児院が茶臼原に全移

転してからは、寄付金も受けず経営的に困難を来したが、院長の大原は全て自弁した。

しかし大正15年(1926)岡山孤児院は解散する。柴田は次ぎのように述べている。「石井の後継者となった大原孫三郎は明治の社会福祉の在り方を批判し、新たなものを考えている。明治の社会福祉は対症療法的であって、実はその背景にある社会問題研究がより緊急であるといい、それは石井批判であり岡山孤児院の批判でもあるが、これこそ石井の精神を継承することであると大原はいう。大正6年石井の大阪事業の地に石井記念愛染園を創設し、そこから大原社会問題研究所が生まれ、一方岡山孤児院を解散する。それは明治期の社会福祉の終焉を意味するといえる」³⁵⁾。

明治期の、特に石井によって行われた孤貧児の救済事業を先に述べたような捉え方で、柴田は社会福祉と言い、岡村は社会福祉事業の方向性が見えると言う。石井は慈善事業の中に、単に救済だけでなく、自立して社会に出て行けるような、教育をし自活の道を与えた。慈善事業にとどまらない社会事業つまり今日でいう社会福祉といえることができる。

ここで問題は石井の場合「防貧」は孤児その人に限られていたことである。

大原はその孤貧児、女子労働者の背景に、個人をそこへ陥れているところの問題、例えば「貧困」を個人に留めず社会問題として研究の対象にし、地域も大阪に限らず全国的な広がりで見ようとした。石井を受け継ぎながらそこに留まっていなかった。そこに、大原の特質を見ることができる。

社会教育として、大原が主催していた「倉敷日曜講演」の講師小河滋次郎等から、「我が国ではまだ防貧の研究はあまり進んでいないから、まずこの社会問題を科学的に研究することが急務である」³⁶⁾と聞き、先の愛染園に「救済事業研究室」を作り、これが大原社会問題研究所の母体になったのである。

岡山県高梁に生まれた留岡幸助は、牧師から北海道集治監教誨師になり、感化事業として家庭学校を設立したことで社会福祉史上、石井と並び著名であり、また同じ時代の社会事業家として石井と交流を持っていた。

大原が岡山孤児院を解散したとき留岡は、「『集合教育』や『施設収容』が最善でなくても次善であり、解散はキリスト教の信仰が薄れたためか、石井がいないことが真因であろう」³⁷⁾と批判的な論説を書いている。留岡の心情としては無理のない所である。

石井の最終的目的が「伝道」であったとする時、石井を批判して岡山孤児院を解散し、社会問題研究所を作った大原の判断は、先にもふれたとおり、明治以後の社会事業を動かすために、時代として必要な思考であったと捉えることができる。

くり返すと、石井の理念は個人の「救貧」から「防貧」にむかい、大原は個人ではなく社会問題を研究の対象とすることで、社会の貧困とその原因の除去による「防貧」の科学的分析に向けられたのである。それは時代の要請でもあった。日本の資本主義の初期を支えた農村からの低廉な労働力は、「女工と結核」³⁸⁾でも明らかにされているように、多くの問題を、資本家に

も社会にも投げかけていた。大原は、自分の会社経営にも、積極的にそれらの問題に立ち向かい、取り上げていった。その際、石井の岡山孤児院の経営で見た人道的な孤児への対処や教育方法が、「労働理想主義」の理念として実現した。

倉敷紡績の社長就任後「企業内の学校、炊事・医療施設の改善、家庭的暖かさあふれる分散式寄宿舍、緑と太陽に恵まれた職工村」等の実現であった³⁹⁾。

4. 大原孫三郎が受け継いだもの

石井十次にとって岡山孤児院は、その生涯を捧げた事業であったが、実は「彼は神の国を地上に実現せんとしたのである。岡山孤児院は石井十次にとっては天国への道程であり手段であった」⁴⁰⁾と柴田はいい、石井自身「予にとりては祭壇なり、茲にあらざれば予は天父を見ず」⁴¹⁾と言っている。キリスト教精神を基礎として農業を生活の基本とする理想境を作り、これを里親村にしようとしたが十分果たしきれず、それが岡山孤児院解散の原因にもなる。

大正3年石井病没後、後継者となった大原は石井の精神を次ぎの様に汲み取っていた。

つまり施設収容の限界をしり、全国に岡山孤児院を模範としてできていた孤児院の弊害に対して、責任を感じていた石井は民間社会事業への疑問を持っていた。「孤児院事業などは国家或るいは富家が当然経営すべきものにして、個人がするものではない」⁴²⁾と、判断していた。この弊害について大原は、「孤児院は社会の落伍者のドックであるというような宗教教育をしたため暗い気持ちを持たせた結果、特殊階級の制作に堕したこと、経営のための寄付募集行為などが、独立心を減らし、自営の精神を奪ったこと、石井没後職員も精神を理解せず形骸だけが残った」⁴³⁾ことを解散の理由にあげている。これらの弊害を避けるためには、孤児発生の原因や貧困等、社会問題そのものを研究する必要があると益々強く大原は考えた。

そこで、岡山孤児院との関係を切って、大阪市に、先に述べた財団法人石井記念愛染園を設立し、「広く社会事業ノ根本調査研究ヲ以テ目的トスベシ」⁴⁴⁾とした。この研究室は後の大原社会問題研究所や、倉敷労働科学研究所を生み、岡山孤児院が、明治時代社会事業の先駆となったように愛染園は大正から昭和へかけての社会問題、労働問題研究の母体となった。

創設者石井の持っていた、孤貧児に対してなんとか、自分がしてやらねばという宗教にもとづいた愛情は、無制限収容をもたらし、東北凶作時には一時、1200人を越える児童を抱えたこともあった。再々皇室から下賜金を受けた事も、神の意志の実践者として、石井の意欲を湧かせたことと思われる。その情熱が民間慈善事業の精神であり、岡村のいう「自発的社会福祉」であった。

明治時代に、宗教に支えられた石井の実践は多くの孤貧児を、飢えからも貧しさからも救った。自立して生活ができ、再び貧しさに陥ることのないよう、石井の理念のもとに孤児達は実業によって働くことを学んだ。しかし、それは救貧の延長としての防貧であり、孤貧児個人の

更生というべきものである。

大原は「石井個人は偉大だが、岡山孤児院の仕事は、事業としては成功しているとは言えない」と語っている。

「救貧」より「防貧」を選び、しかも問題をより社会的、科学的に社会事業として捉えようとする大原孫三郎の行動を、時代は必要としていた。その大原の理念の成長は、石井との交流によって、互いに深く影響し合う中で生じたものと考えられる。

引 用 文 献

- 1) 柴田善守著『石井十次の生涯と思想』、春秋社、昭和39年、20頁。
- 2) 柴田前掲書、22頁。
- 3) 柴田前掲書、21頁。
- 4) 柴田前掲書、23頁。
- 5) 柿原政一郎著『石井十次』（日向文庫刊行会）、41頁。
- 6) 柴田前掲書、22頁。
- 7) 『石井十次日誌』（石井記念友愛社）、明治20年、41頁 以下石井日誌と略す。
- 8) 『石井日誌』、明治20年、321頁。
- 9) 『石井日誌』、明治20年、82頁。
- 10) 『石井日誌』、明治22年、18頁。
- 11) 『石井日誌』、明治22年、168頁。
- 12) 柴田前掲書、67頁。
- 13) 『石井日誌』、明治22年、614頁。
- 14) 柴田前掲書、70頁。
- 15) 柴田前掲書、77頁。
- 16)、17) 柴田前掲書、80—82頁。
- 18) 柴田前掲書、97頁。
- 19) 『石井日誌』、明治27年、63頁。
- 20) 柴田前掲書、135頁。
- 21) 柴田前掲書、112頁。
- 22) 岡村重夫著、『会福祉原論』全社教、昭和58年、16頁。
- 23) 岡村前掲書、5頁。
- 24) 岡村前掲書、18—19頁。
- 25) 柴田善守著、『社会福祉の史的発達』、光生館、1985、119頁。
- 26) 柴田前掲書、158—159頁。
- 27) 柴田前掲書、153頁。
- 28) 池田敬正著、『日本社会福祉史』法律文化社、1986、348頁。
- 29) 西内天行著、『信天記』、警醒社、大正7年、549頁。
- 30) 西内前掲書、551頁。
- 31) 西内前掲書、554頁。
- 32) 『大原孫三郎伝』（大原孫三郎伝刊行会）、昭和58年、35頁。
- 33) 同上、41頁。
- 34) 同上、43頁。

- 35) 柴田前掲 (25), 159頁.
- 36) 前掲 (32), 125頁.
- 37) 柴田前掲 (1), 254頁.
- 38) 石原修著, 「女工と結核」, 光生館, 1970, 参照.
- 39) 『倉敷紡績百年史』(倉敷紡績株式会社), 31頁.
- 40) 柴田前掲 (1), 264頁.
- 41) 『石井日誌』, 明治31年, 72頁.
- 42) 柴田前掲 (1), 270頁.
- 43) 前掲 (32), 217頁.
- 44) 柴田前掲 (1), 295頁.

(平成5年10月21日受理)